

《入選》

差別のない社会へ

彦根中学校 2年

荻野おぎのくるみ さん

世界でコロナウイルスが流行するようになってから、私はニュースやポスターなどで「コロナ差別」という言葉を目にするようになりました。「コロナ差別」とは一体どういうものなのかインターネットで調べてみると、私のまわりでも実際に差別に繋がるような出来事が起きていたということが分かりました。これを機に、私は「差別」というものがどのようにして起こるのか考えてみました。

私が実際に目にしたのは、何気ない学校生活の中の出来事です。ある日、一人の

クラスメイトが学校を欠席したとき、私は何人かの生徒が「あいつはコロナなんじゃないか」とうわさを立てていたり、「あの子はコロナらしいよ」と広めている人を目にしたことがあります。また、その次の日も欠席している生徒に対して、「やっぱりコロナだ」と勝手に決めつけるような発言をする人もいました。その時私はその発言について特に何も思わず聞き流していましたが、今よく考えてみると、これも一つの人権問題だったのではないかと思います。欠席しているからコロナ、何日も休んでいるからコロナなどと簡単に決めつけられては、それをされた側は絶対にいい気持ちにはならないだろうし、悲しい気持ちになる人も多いでしょう。これが、言葉による差別です。その発言をした側は、特に相手を傷つけないわ

けでもなく、差別をするつもりもなかったのかもしれない。しかし、知らない間に相手を傷つけて、トラウマにさせてしまうこともあると思います。それほど、言葉は目に見えない凶器です。だからこそ、常に「この言葉は本当に言っているのか」、「この発言で傷つく人はいないのか」など、慎重に選ぶ必要があると思います。

私は初めにコロナ差別という言葉を知ったとき、「私の周りでは起こっていない」と考えてしまっていました。けれど周りをよく見てみると、とても身近なところで起こっていることに気づき、「知らないうちに」「いつの間にか」起こってしまうのが差別の怖いところだなと思いました。世の中には、コロナ差別の他にも様々な差別があります。これらをなくすためにも、まずは自分自身の

行動から見直していきたいです。